

講義「新旧古典で解きなおす現代アメリカ」 を終えて

Post-lecture Talk

American Society Now through Canons

石川敬史・大泉惟・鈴木俊弘・関口洋平・松原宏之
ISHIKAWA Takafumi, OIZUMI Yui, SUZUKI Toshihiro,
SEKIGUCHI Yohei, and MATSUBARA Hiroyuki

松原 立教大学アメリカ研究所の松原でございます。本日は、2020年秋学期にアメリカ研究所が中心になって開講したコラボレーション科目「新旧古典で解きなおす現代アメリカ」にご登壇いただいた4人のみなさんにお越しいただきました。石川敬史さん、大泉惟さん、鈴木俊弘さん、関口洋平さんです。どうぞよろしく申し上げます。

この講義は、アメリカ研究を専門にする日本最古の研究機関である立教大学アメリカ研究所が、その研究成果を全学の学生に還元する試みです。2018年度に生井英考さんが中心に開講くださった「〈トランプ時代〉の解剖学——アメリカ文化の現在」につづく第2段として企画されました。

今年度は趣向を変えて、新旧古典を受講生の皆さん自身に検討してもらおうと考えました。講師の話聞くだけでなく、自分の手で古典と呼ぶにふさわしいテキストをじっくり吟味してもらい、最後レポートを書いてもらうという講義です。

中身をご紹介しますと、おおよそ時代順に4つのテキストを選びました。石川さんにやっていた第1ユニットでは、独立宣言と合衆国憲法の2つのテキストを読む。第2ユニットでは大泉さんとともに、トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』を読みました。第3ユニットでは、鈴木さんにグリフィス監督の『国民の創生』をたっぷりと講じていただきました。最後に関口さんの第4ユニットでは、これもタイムリーでしたが1月6日の連邦議事

堂襲撃も起きるあのタイミングでヴァンスの『ヒルビリー・エレジー』を読みました。現職トランプを民主党のバイデンがからくも破った2020年大統領選挙の余韻を楽しむように、『国民の創生』から『ヒルビリー・エレジー』へと行くという展開だったかと思います。

「アメリカ独立宣言」「アメリカ合衆国憲法」

松原 まずは、講義で大事になさったことをご紹介ください。石川さんが最初におっしゃっていたように、これはみんなが知っているテキストですよ。独立宣言と合衆国憲法。

石川 はい。古典としてこの二つの文書を扱うのは最初は少し奇異に感じました。

松原 でもそんなにちゃんと読み込んでいないという。

石川 たぶん読んでいない人のほうが普通でしょうね。

松原 こういったテキストを講じるときの勘所を、石川さんはどの辺りに置いておられたのでしょうか。

石川 やはり英米法の授業ではないので、勘所としては文書成立前後の歴史的経緯の中に文書を置いて説明をするということを中心にしました。

松原 最終回に学生たちとユニットの振り返りもやりましたが、要するにあり合わせ・間に合わせの建国みたいなことを言っている学生がいて。

石川 ああ、良い意見ですね。

松原 割と要所をつかんでいるなという。

石川 ええ。要所をつかんでくれてうれしかったです。つまりあれはもう建国の父たちという何か神々のような人々がつくった不磨の大典ではなくて、あの時代の上質な知識人たちが、実際の政治情勢の中で、取りあえず知っていることをつなぎ合わせてつくった間に合わせの文書なのです。

松原 苦しまざれだったのですね。

石川 後から解釈で立派にしていっていったという。やはりアメリカもコモンのローの国なんだと私自身も授業の準備の過程で再認識しました。

松原 大統領選の年に、その成立史も含めて独立宣言と憲法を読んだのは大

事だった気がします。大統領選の仕組み一つを取っても、制定過程を含めて憲法をじっくり読んでいると、いろいろと腑に落ちる所があります。なんでこんなにおかしなことをやっているんだという疑問にも納得がいく所がたくさんありました。

どうでしょう、鈴木さんは石川さんのユニットにも初回からおいでになっていましたが。

鈴木 僕は石川先生のファンですので（笑）。ずいぶんと昔から先生のブログを読んでいたので、ずっと石川先生とは知らずに。それらはアメリカ建国の世界観についての的確な表現にあふれていて、なかでも国家空間の肌感覚を綴ったエントリーが忘れられません。狭い北海道程度の土地を開拓しようとしても、日本人はあの広さに耐えられない、そんなものだからアメリカ大陸の建国というプロジェクトなんて絶対に耐えられないというのが、石川先生のご指摘で。（オリジナルは遥かに素敵で詩的な表現なんですけど。）いや、本当だなといまでも思います。アメリカに初めて行ったときに、この目の前の空間をどう理解したらいいんだろうという、国家空間の把握に脳みそがオーバーフローしてしまうという気持ちというのをようやく言語化できたこともあって、ずっと石川先生のファンでいるんです。この機会に生で先生のお話を聞けて、本当によかったです。

石川 確かにあの国のあの広さですよね。アメリカの暴力性を考える際にも、あの広さをちょっと抜きに考えられないのかなと思います。いわゆる「国民性」などという言葉は、もう今はちょっと駄目な言葉ですけども国柄の形成には関係しているのです。アメリカと比較して規模は比較にならないほど小さいですが、やっぱり北海道開拓を見てると、それなりに暴力的でした。

3回やってみて、時間の制約とか、初学者が対象ということもあるので、2つの文書の成立の歴史のみを語ったのですけれども、もう一つ僕が時間内に語れなかったことがやっぱりあって、それははっきり言って人種の問題なのですよね。

つまり合衆国憲法やその前の独立宣言が後に人種的な平等を実現するための仕組みとなったと論じました。書いた人たちは想定していなかったけれど

も、後に平等を実現する装置として機能したというところまでは言ったと思うんだけど、本当はここから先の考察が重要なのです。例えば南北戦争後の再建期からリテンションが終わった後、ここから本格的に人種差別の歴史が始まっていくわけですよ。

松原 そうですね。

石川 この二つの文書が本当に人種平等を実現する装置として機能したのかということはあえて問い直さなければならない。タナハシ・コーツは、立派な黒人が存在しては白人国家として始まったアメリカは困るのだと論じていますね。

松原 『僕の大統領は黒人だった』¹、ですね。

石川 つまり独立宣言と合衆国憲法の文言だけを読むと、黒人がアメリカ市民になれないはずがないです。

松原 そう、誰もがなれるはずですよ。

石川 ところが法律ではなくて、社会システムが、彼らを市民にするのを妨害し続けてきた。その結果、逆に独立宣言や合衆国憲法の文言が、やっぱり不適合な黒人はちゃんとしたアメリカ市民になれないんだという証拠に使われたのではないか。あるいはそれは人種差別を永続化するために使われた可能性はあるのではないかという問いも提起すべきだったかもしれません。

僕は法学部出身なものですから、上部構造から話してしまったんですけども、やっぱり下部構造をもう少し時間があれば、本当はやりたかったなと。古典を読むというところで、2つの文書を読みましたが、いわゆる制度化された差別というのは社会的なものですよね。あれは法学的なものとはちょっと違うと思うんですよ。だからそういう社会史的な所に触れられなかったのが、ちょっと自分としては悔いの残っているところです。

松原 第3ユニットの『国民の創生』からは、はっきりとアメリカと人種というテーマが正面に出てきます。そこからあらためて振り返ると、第1ユニット、第2ユニットであつかう2つのテキストの中で、その人種の話はどのように出てくるのか、出てこないのか、どう講じるべきなのかという問いですね。

石川 事実の問題として、「独立宣言」も「合衆国憲法」も黒人の入り込む

余地がなかった時代に作られたテキストですからね。

松原 4つのユニットをどう組むべきだったのか、どう読むべきだったのかは、ずっと気になっていることです。石川さんとしてもやっぱり気になる所ですよ。3回だとなかなかそこまでは行けないけれども。

石川 時間的な制約で行けなかったけれども、問題意識はあったということです。

松原 そうですね。

石川 ただ初学者に全部突っ込むというのはなかなか難しい。

松原 あまりよくない。いろいろ言っちゃうと分からなくなるか、どこか断片だけ取るかになってしまいます。

石川 だから取りあえずどさくさ紛れに作った文書なんだ、ぐらいまでを理解していただければというところですね。ただし、確かに両文書が社会運動や解釈を通して人種平等の根拠になったというのも法学的には事実なのです。これも忘れてはいけません。

松原 建国期の弱小国家が奴隷制や州権の問題に手を突っ込む余力はなかったわけです。取りあえず仮初めにでもまとまっている必要があるというようなお話だったかなと思います。

『アメリカのデモクラシー』

松原 第2ユニットのほうにも話を移したいのですが、トクヴィルという、これはいかにも古典らしい古典ですね。

大泉 ザ・古典ですね。

松原 このテキストを今年読むときにどうするか、あるいは大泉さんという研究者がどう読むか。いろいろ思案なされたかと思います。第2ユニットの肝は何だとみて授業なされたんでしょう。

大泉 この全体の大テーマあるいはタイトルが新旧古典を通じて現代アメリカを読むということなので、単にトクヴィルの解説はしたくなかったという思いがあります。つまり「上巻はこういう内容で、下巻はこういう内容だから、みなさん覚えましょう」という暗記をさせるのではなく、このトクヴィ

ルの本を全員で読むことで、アメリカの政治システムや、国際政治に対して持つ私達の思考枠に揺さぶりをかけたかったという考えがありました。具体的に言えば「民主主義を相対化する」ということですね。この点については初回の授業でも説明しています。例えば香港で展開されているデモ活動や、もしくはロシアの人権問題、あるいは先ほど言及していたトランプистたちの暴動、それらに関する大手新聞の社説を読むと、大体は民主主義というものを善政として見なす傾向があるわけです。まあ「良いもの」としてね。

松原 あるべき理念モデルとしては民主主義があって、対照的に、香港での民主派抑圧やアメリカでの連邦議事堂襲撃があるというような通俗的理解ですね。

大泉 そうです。図式としては「民主制」と「独裁」を対置する。そういう捉え方が大変目立っているのですね。ところが、実際には民主制というシステムにも相当独裁的な部分が含まれているのです。このことはかなり昔から言われていることで、1972年に同書を翻訳した井伊玄太郎氏も「民主制は自己矛盾的に圧政の芽を含んでいる」というコメントを残されています。このように以前からちょくちょく言われていることなのですが、一般には伝わっていないというのは日々感じるところです。

こうした民主主義の見直しといいますか……「相対的に見る」ということですね。手放しに礼賛するのではなくて、良い所、悪い所をつぶさに検討していく。このことを本格的に実行した初期の本としてトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』が挙げられると思います。ですから、私としてはこの本を読む行為を通じて、私達が普段から接している民主主義についても一度考えてみましょうというメッセージを届けたかったわけです。

松原 そう伺うと、第1ユニットの石川さんと第2ユニットの大泉さんとの共通点が見えてきます。アメリカ合衆国を見ると、しばしばモデル民主主義国家としてのアメリカを立てて、それとの対比で日本社会のことを思案しがちなわけだけれども、いやいや、そうでもないぞということですね。民主主義の実態は時代状況に規定される部分があるし、民主主義というシステムがどういう性質を持っているかが現代的にも問われます。19世紀の環大西洋世界を見ながら、トクヴィルが新しく登場してくるこのシステムをどう

評価しようかと思案した同時代的な思想の書でもあるのが『アメリカのデモクラシー』だと。

大泉 そういうことですね。

松原 大泉さんから見て、第1ユニットと第2ユニットのつながりや関係はどうお考えですか。

大泉 石川さんの授業の中で、実は独立宣言というものが大っぴらに宣言されたというよりは、むしろ秘密会議のような場から発されて、結果的にある種の神話化がされたという話があったと思います。

松原 後から思い出される宣言ですね。

大泉 そのエピソードを踏まえて考えてみると、独立宣言同様、民主主義という思想も神話化がされてきたということが言えるのではないのでしょうか。アメリカが最終的に国際社会でヘゲモニーを得たからこそ、非常にパワーを持ったわけですが、歴史的に見ると幾度の危機を乗り越えて今日に至ったものなんですね。絶対的ではなく、相対的かつ歴史的に構築されてきたイメージである点は、とてもよく似ていると思います。授業でもそのことを意識して話をしたつもりです。

松原 今回の授業は基本的にはアメリカ史の中で考えたわけですが、別のやりようもあったのかもしれませんが。当時の国際情勢に照らしてとても脆弱で、実験的でもあるアメリカ合衆国の経緯や性質は、『アメリカのデモクラシー』を批判的に読むことでわかるかと思ったのですが。

『国民の創生』

松原 さて第3ユニットでは、1本ぐらい映像を入れたい思いもあり、グリフィスの超大作『国民の創生』を選びました。鈴木さん、いかがでしょう。ご講義はこれもまた大変評判が良くて、映画論としての『国民の創生』論までを含めて学生はすごく楽しんだようですが、鈴木さんとしてはどういう戦略があって、あの3回の授業になったのでしょうか。

鈴木 まず立教の学生さんのレベルがとても高いというのは最初から知っていたんで、『国民の創生』はどこかで耳にしているだろうと算段を立ててい

ました。あの作品は有名だけど、同時にとても人種差別的な問題作だって、必ず他の授業で聞いて知っていると思ったんです。なので、そこから説明する必要はなかった。他の大学だと「この映画は云々」というところから始めなきゃいけないんです。むしろ、なぜ20世紀にもなって、あんな時代錯誤な、全力で人種差別してます！的な映像表現が出てきてしまって、しかもそれが当代随一の監督によって作られてしまったんだという、この根本的な謎への言及から始めようと思いました。『国民の創生』は芸術と政治と人種差別がごった煮になっている悪魔的作品として、大学の講義ではおそらく他にリーフェンシュタールがナチのために撮った『意志の勝利』あたりとセットになって語られるのが様式なのでしょうけど、僕としては、何だろう、もっと情報が欲しいな、あの映画が1915年に封切られたという同時代性とテクノロジーの問題もちょっと見てほしいなどの考えがありました。

映画というのはいきなり「映画」というパッケージから始まったんじゃないことは共有しなければならぬ文化情報だと思っています。アメリカの場合、都市であつたらヴォードヴィル劇場が乱立して、片田舎だったら伝統的なイベントの日に仮設舞台を作りやってくる顔なじみの巡業劇団がいて、大量移民の時代には伝説のコーハン一家のような、お父さん・お母さん・子どもたち全員で一座を組んで、粗野な minstrel show からお上品な歌唱劇まで何でもやるドサ回りの移民劇団がせめぎ合っていて、人びとはそれを十分に堪能して育ってきました。そんな世界のなかに「映画」が出現したことを知る必要があるんです。たんなる光学技術の革新ではなく、視覚文化のテクノロジーが何世代にも積み重なっている場所に銀幕が降ろされて、それにみんな集まってくる状況が整っていて、でもゆっくりと世代交代が進んでいる。その過渡期にできたのが他にもない『国民の創生』という作品なので、やっぱり作品のあらゆる局面で「つくり」の半分は古典的、伝統的にならざるを得ません。そのうえで、もう半分はとても革新的だったんだということがあの映画作品の最初のツボなのです。そのために、まず一番初めに『国民の創生』はどのような文化の状況下で作られて、どのような制約があったのかという前提条件をお話しははじめました。観客の反応がダイレクトでシビアなアメリカのショービジネス世界って、難しいのです。ヴォードヴィルのレベ

ルが高くって、客層はバラバラでもみんな妙に目が肥えていますし。お金支払って観に来てくれる人の認知枠を考えると基本の筋書きはヴォードヴィルのにしなければいけません、そこで勧善懲悪という王道劇にスペクタクル性を高めるために、あの時代特有の映像技法つまり「敵は黒い、味方は白い」という、戦争映画の文法を流用してきたというところをまず確認していただけたらと思いました。

この十年ほどでアメリカ議会図書館が19世紀末の貴重な映像、特に米西戦争時代のフィルムを無料公開しはじめて、誰でも見られるようになったのが大きいです。一人ひとりが自分の目で映像を確認できるような状況がやってきたので、こういう伝わりにくい話を講義にしても大丈夫になりました。米西戦争ものの作品で黒人エキストラにスペイン兵を演じさせ、かれらを白化粧のアメリカ兵が駆逐していったというような映像も簡単に見られます。それを『国民の創生』と順番に再生すれば、僕の話なんていりません、「繋がり」は一目瞭然です。そして再現映像と実写映像を重ね合わせていくという説得力の高い技法が、実は『国民の創生』独自じゃなくて、アメリカの映像史の中で、特に戦争を賛美する国民的なまとまりに資するための「戦争映画」という原初のジャンルで組み上げられてきたこともすぐに判ります。そのうえで黒人に対する差別はどう描かれていったの、という核心に行きたかったんですけども、時間がなくなってしまって独習してくださいという形になってしまいました。僕の組み立てがダメダメだったので、学生さんには悪いことしてしまいました。

松原 ものすごい情報量でしたからね。レジュメの中にQRコードが貼ってあって、そこを飛ぶとさらに別の授業が入っている。

鈴木 PDFレジュメにリンクを埋めて配布するというのは、対面授業だと絶対にできない怪我の功名的な発見でした。リンクを沢山埋め込んでおいて、興味のある部分をクリックすれば、学修を手引することができるというのは受講生の皆さんにも利益が多いのではないかと考えてます。僕自身もいろいろなことをPDFに詰め込むのは、ディテールを作り込むプラモデルの製作のようで純粋に楽しいので、配布PDFにいろんな情報を詰め込む行動をエスカレートさせていったわけです。

松原 授業の技術的にも、僕は鈴木さんの回からいろいろ学びました。僕はこんなにちゃんとレジュメ作ったことないんだけどなあと、思っています。

鈴木 今年は本当に大変だったんですけども、講義技術的にもいろいろ学べる機会がありました。話を戻しますと、実際に同時代の「レイピスト黒人の神話」みたいな重要な解説に行こうと思ったら、息が切れてしまったんで残念でした。

松原 いや、論旨はそこまで通っていました。レイプ神話の話自体はたぶんどこかで聞いた人もいるんだけど、前半1回目から2回目にかけての映画論というか技術の話と、演劇の伝統の話と、植民地戦争をしていくアメリカという話が合わさって説明されたことで、レイプの物語を組み込んでいく理由や、それがどう効果を発揮するかまでがよく伝わったと思います。

鈴木 アメリカの帝国主義的膨張と人種表象の連関性を説いてくれているのは、エイミー・カプランです。僕は実はカプランを訳している訳者の一人として、『帝国というアナーキー』²を訳しているときに、その議論をいつかどこかで使いたいなと思っていて、ずっと機会を待っていました。ようやくこの『国民の創生』の授業でカプラン先生の議論に言及することができました。よかったです。

松原 カプランは読んでいたつもりでしたが、ああいう深さでは読んでいなかったことがよく分かりました。

鈴木 ちょうど別の非常勤講義で移民とヴォードヴィルの話をしていたので、本当にタイミングよくさまざまな要因がつながって、2020年のこの授業に臨むことができました。

松原 関口さんも遊びにおいでで、関心を示しておられたように思いました。今の鈴木さんのお話を文学研究、文化研究の関口さんが聞くと、どんな感じになるんですか。

関口 まず、一つオンラインでよかったなと思ったのは、他の先生の授業を気軽にのぞきに行けるということでした。もちろんお話の内容もたいへん刺激的でしたが、それだけでなく授業のスタイルや学生との関係の築き方など、いろいろな点で新しい発見がありました。

鈴木さんの授業に関しては、専門的に一番近いような所もありますので、

非常に興味深く聞かせていただきました。『国民の創生』というテキストに対して文学研究や映画研究、歴史学などいろんな分野の知見を生かしながら話を進めていくというのが、とても刺激的でした。学生さんもそれにきちんと付いて来て、鈴木さんのお話の意図をしっかりとくみ取った質問やコメントが多くて、対話的な授業になっているのが素晴らしいと思いました。

『ヒルビリー・エレジー』

関口 私の回の話を見せていただくと、この4つのテキストの中では、いろいろな意味で例外的なテキストだろうと思うんですね。非常に現代的なトピックですし、読みやすいですね。

松原 学生が事前に読んでいる率は第4ユニットが一番高かったです。

関口 そうですね。この授業の中で扱わなくても、学生さんが自分で読み、読めるテキストではあるんですね。ただやっぱり『ヒルビリー・エレジー』を一人で読んだだけだと、そこからこぼれ落ちる情報というのがあるはずなので、二次資料を参考にしながらヴァンスの議論を相対化していくというのが一つ考えたことです。もう一つ、それと別に意識していたのは、このテキストを「わかりやすい話」として要約しないほうがよいのではないか、ということでした。『ヒルビリー・エレジー』の問題点というのは多くの学者が指摘しているわけで、そういう議論に乗っかるのは簡単なのですが、それだけじゃなくて、『ヒルビリー・エレジー』の中にある、矛盾であるとか、分裂であるとか、そういうものを丁寧に追って行けないかと。『ヒルビリー・エレジー』というテキストを論破するんじゃなくて、その中にある矛盾を検討していったほうが、話としてもスリリングだろうし、いろいろ学んでもらえることが多いんじゃないかということです。要するに、テキストを丁寧に読んでいくということと、テキストの外の情報を付け加えていく、そのバランスをどんなふうに取っていくのかというのが、一番苦労したというか、考えた点でした。

松原 学生さんの反応を見ていると、テキストの外からいろいろと持って来て実はこうですという話だけでなく、テキスト批評の仕方を学ぶ所が見

受けられました。それはちょうど鈴木さんのユニットとも連続していて、映画なりヴァンスの本なりにそのまま取り込まれるのではなくて、じっくりとその中の内的な論理をあぶり出すとか、内的な論理がぶつかっている部分に気が付くことを、関口さんは執拗に学生に促していましたね。それには学生がよく反応していました。テキストを読むときの目が斜めになっていくというか、疑い深く読むようになる感じがあって、なかなか面白い3回シリーズだったなと思いました。

古典のセレクション

松原 今回の4つのユニットの構成はこれで紹介もでき、記録もできたと。ここから先は不規則発言もありをお願いします。

石川 連邦議会議事堂占拠が報じられた際に、ニュースでもキャスターやコメンテーターがよく言っていたんですけども、いわゆる「民主主義のモデル国家としてのアメリカが」という驚きの言葉が冒頭に付くんですけども、ひょっとしたら今の学生世代、2000年代生まれみたいな人たちにとって、アメリカを民主主義のモデル国家と見ているか、あるいは非常に無防備にアメリカン・スタンダードを内在化させてしまっているんじゃないかという感じが、僕はちょっとしていて、だから起こった出来事を見たときに、ただびっくりするという反応になったのだと思うんです。しかし今回の一連の授業の構成は、アメリカにはああいうことが起こり得るんだぞということを、むしろ歴史や文化から説明できたんじゃないかという気がするんですよ。

民主主義のモデル国家としてのアメリカ史を解体したという側面もありつつ、もう一つアメリカを内在化させちゃっている学生に対して、歴史的経緯からして、今回のことはあり得たことなんだということを言えた意義もあったのではないのでしょうか。

松原 既に9月末からちゃんと準備されていたという素晴らしさ。選挙戦がどんどんおかしくなっていくのを見ながら、第1ユニットを思いおこして確かにあり得ると納得するような。

石川 建国の経緯からが概観すると、2020年の大統領選挙以降の出来事は、そこまで驚くべきことではない。

松原 聞いていた展開のとおりじゃないかと。ご講義がずばりとはまったわけですね。

関口 石川さんからさっき人種の問題を拾いきれなかったというお話があったんですけども、それは私の授業も一緒に、ヒルビリーと白人性の問題というのをそこまできちんと扱えなかったので、ちょっとその点は反省しているところです。ただ、この4つのテキストを見ていくと、人種の問題というのが、『国民の創生』は別として、そこまで前景化されているわけではないけれども、よく読み込んでいくと、やっぱりどのテキストにもすごく関係している、「白人性」を考えるためには格好の題材となっていると。

この間の選挙の後に起きたことを見てみると、やっぱり人種問題の根の深さというのが分かる気がするのですが、そういう意味で言うと、どうなんでしょうね。人種問題がどういふふうにして隠ぺいされているのかというのを、私のユニットで、この4つのテキストの関係などにも触れながら考えられればよかったのかなと思っています。

松原 二重のコメントなわけですね。一つは、今回のラインナップは『国民の創生』だけが明示的に人種の話を買っていて、人種主義国家アメリカを捉えるのにはちょっと弱い。とくに最初の2つのユニットはその側面が見えにくいテキストを選んでしまっていて、一考の余地があるというご示唆ですね。でももうひとつ関口さんがおっしゃるのは、それはそれとして、しかしその限界をもっとあぶり出すような読み方があり得たのではと。

関口 はい。4つのテキストの選び方ということで言うと、よくも悪くも、アメリカの大学で同じような企画があったら、もしかしたらこの4つは選ばれないかもしれない、と。特に後半の2つは選ばれないのかなという。

松原 古典という意味ではということですか？

関口 古典というか、そもそもアメリカの大学の授業では敬遠されてしまうトピックなんじゃないかなという。じゃあ他に何を読むのかと言われると、こうだとも言えないのですが。ただ、だから別のテキストを選ばなきゃいけないという話じゃなくて、日本の学生とアメリカの学生だと、全然立ち位置

が違って当たり前だろうと思うので。日本の学生に読んでもらうなら、やっぱりこれでいいんじゃないかなと、僕は思うんですけども。

松原 それは例えば『ヒルビリー・エレジー』なんかだと、日本で読むときには、第三者の視点から見ているような所があって、当事者のことを気にしないで選んでしまっている。けれども中西部の大学でこの本を扱おうと思ったら、もっと慎重にやらないと難しいといった意味でしょうか。

関口 その通りだと思います。あとは日本の学生たちが何を読めるのかというのと、アメリカの学生が何を読めるのかということでも違ってくるのではないのでしょうか。あるいは、アメリカの学生にとっては、例えば『国民の創生』が人種差別的であるというのは、大学に入学する以前にある程度学んでいることかもしれないので、そこまで詳しくやる必要もなかったりするのかもしれない。共有しているコンテキストが違えば、選ばれるテキストも違ってきて当然だということか。

松原 もっとマルチカルチュラルなテキストを選び得たのかもしれませんが。今回の4冊は、ジェンダーにも乏しく、登場するグループも限定的ではあって、もうちょっと別な選択があったのか。確かにそうですね。そうかもしれない。

みなさん、いかがでしょう。この4つのテキストを選んだことのメリットやデメリットや、あり得た別のテキスト、あるいは今回のテキストのあつかいにも別のやり方があったか。石川さんが冒頭に人種の話も本当はもっとやり得たとおっしゃっていましたが、関口さんの最後の話もそれに近いかもしれません。

石川 例えば私は一応史学科の教員で学生に西洋史を教えるわけです。当然1年生にはまず、ヨーロッパの歴史を教えるんですけども、アメリカをどう日本の学生に教えるか。例えば立教みたいにアメリカ研究所が設置されている歴史がある所はまた違うのかもしれませんが、まあ普通に史学科で西洋史で入ってくるというと、やっぱりヨーロッパから入ってくるわけです。そうするとアメリカというところとちょっと何と言いますか、コンテキストが変わるんですよ。

松原 変わる。いろいろ変わる。アメリカ史の専門家が本郷にはいないと

か、いろいろコンテキストが変わってきます。

石川 驚くべきことに本郷の西洋史学研究室にアメリカ史がないんですよ。そういうのもあって、例えば人種の問題を扱うと日本の学生にきょんとされるのです。ジェンダーは今の時勢もあり時々食いついてくれるんですよ。特に就職活動などをすると生々しく感じるんだと思うんですけども、人種の問題に触れるときに、まずは奴隷貿易から話を始めなきゃならなくなるとか、それから南北戦争後のリデンプションの話をしなければいけません。すると授業期間に間に合わないということで、ゼミのテキストを使うときは、逆にアメリカものを使いづらいということがちょっとありますね。コンテキストが「西洋史」と隠微に、しかし決定的に違うのです。

松原 確かに。アメリカのことを話すときに、人種の話は欠かせないけれども、人種やジェンダーの話をする、途端にああそれは何かアメリカ的な特殊事例だ、みたいな体で、アメリカ例外論に押し込まれるみたいな所がありますよね。

石川 私は勤務校では2年生以降にアメリカ史を教えています。そうしたら学生から1年生の西洋史概説で話していたジャン・ボダンの主権論とか、市民革命による「国民の創生」という物語と違うじゃないかという話が出てくるのです。先生、人が変わったみたいだと。

松原 そうすると何を持ち出せば良いのでしょうか。大西洋の向こう側に均質なヨーロッパ世界があって、大西洋をまたぐと全然別の新世界のアメリカがあるというわけではなくて、グラデーションなのか各種の岩が混じっているのか、いろんな要素が環大西洋世界に入り混じっているという感じはあります。

石川 そうです。近年の環大西洋史の話は、研究もさることながら、実は授業でアメリカ史を教える際に必要なのです。

松原 西ヨーロッパとアメリカだけだと見えづらくいけれども、東ヨーロッパまで眺めてみるともう少しわかる気がします。人種やら身分やらに関わらない市民社会云々と言っている西ヨーロッパ世界の東には君主がいて、農奴が形を変えずとっているような世界がある。これら多様な人たちが関わって、大西洋世界の奴隷貿易や、年季奉公人のやりとり、囚人や貧民のあつかい、

さらには植民者をどこから調達して、どこへ送り込むのかといった話がある。そう見立てると、南北アメリカやカリブまでをふくむ環大西洋世界が実に複雑なグラデーションになっているし、かつ連関していると、言われてきてはいます。

この意味で、アメリカを論じつつ、アメリカ特殊の話をしているというわけではない。アメリカの話をしながらか世界史の話になる講じ方があるはずでしょうか。

石川 そうだと思いますね。先ほどまでの話と矛盾することを承知で申し上げますと、日本人がびっくりするぐらい内在化しているのもアメリカなのは確かなんですよ。

松原 当たり前じゃないものを当たり前だと思いこんでいる。

石川 例えばだから中国大陸のほうに行くと、主な留学先がドイツだったり、モスクワだったりする世界もあるわけで、そうすると、間違いなく日本におけるアメリカというのは、相対化されなければならないし、学び直しされなければならないという点で、アメリカ史の授業は必要なのです。

松原 アメリカから入って、なおかつアメリカを相対化するなにか、ですね。大西洋航路をうろついていた何か奴隷の自伝テキストとか？

石川 今まさに流行っていますしね。

松原 開拓中ですね。

石川 だからアメリカを西洋と見るか、ですよ。西洋なんですけれども、西洋文明の中でアメリカ史をどう位置付けるか。西洋だとしたらものすごく違うんですけれども、だからと言って東洋ではないわけですよ。

松原 東洋ではないとして、これをどうあつかえば良いのか。こういう話は大泉さんが好きかもしれません。

大泉 そうですね。私が敬愛してやまないエドワード・サイードの考えを借りる形で話すと、欧米や日本では民主主義を西洋の産物だと了解して話を進めるのが、一般的なんですよ。

では「民主主義」の対義語として設定される「独裁」はどここの所有物なのかということ、これは東洋になるわけです。アジアや中東、ロシアも入りますね。アラブ、スラブ、モンゴルとでも言いますか……つまりは黄色人種の世

界の産物として理解されます。西洋 VS 東洋、白人種思想と黄色人種思想、優れた制度と劣った制度という理解が前提にあるわけです。

最近、一般向けに書かれた民主主義を題材にした本が出て来たので、何冊か買って読んでみたのですが……。

松原 そういえばこのところ立て続けに。

大泉 宇野重規さんの『民主主義とは何か』³ですね。

松原 空井護さんの『デモクラシーの整理法』⁴とか。

大泉 アメリカ大統領選のあおりを受けて出てきたのだと思います。これらの本は近代民主主義の問題についてもいくつか言及してはいるのですが、「それでも民主主義はやっぱりよくて、ヨーロッパの産物である」というスタンスは決して崩していません。ですから民主主義が上手く定着していない場所として彼らが例に挙げたがるのは、総じて中国やロシアやシリアやイラン、一言で言えば「想像上のアジア」なんです。NATOの仮想敵国だとも言えます。そういう文章に触れると、研究者の中でもヨーロッパ的冷戦的価値観や、それらに縛られている自己の克服が上手くできていないんじゃないかと感じる時があります。それは問題ではないかと思います。

松原 そうすると、デモクラシーに内在している問題をトクヴィルのアメリカ論で扱うというのは、オーソドックスだけれども意義があるわけですね。

大泉 そうです。

松原 おや、鈴木さんが、バーチャル背景を奴隷小屋に変えました。

鈴木 これウィリアム・クリステンベリーの作品です⁵。僕はこのアラバマの美術作家がすごく好きで、南部の不吉な風景をほんとうに絶妙に切り取って作品にしてくれるのです。いま気分転換に奴隷小屋をミニチュアに仕立てた作品を背景にしたんですけど、文化ってコンテキストが第一なんだと改めて思いました。これをただの小屋と見るか、奴隷小屋と見るか。ヨーロッパの人はこんなかわいらしい立体作品を見て奴隷小屋なんてまず発想しません。アメリカの人だけが特異的に解るという、何か不思議な符丁になっていますよね。西ヨーロッパとかスイスの人だったら、これはいま流行のミニマリズムな家だと思っちゃいますよ。

松原 あはは、ミニマリズムね。ミニマルではある。

鈴木 小洒落たアート作品にしてしまうと、これもル・コルビュジエが晩年を過ごした小屋かなんて勘違いしちゃうんですけども、やっぱりアメリカを理解するには、こういう見過ごしてしまう事柄に興味が行くか行かないかが重要なんだと感じています。僕は今回すごく楽しかったのは、とてもアメリカ的なものを先生方が日本的な目を持つ受講生たちに対して、ちゃんと細かく分けてくださったことです。僕はそれがすごくうれしくて、石川先生の講義を聴いていたら、例えば日本の右翼とかが言う戦後憲法が1週間でできたから理不尽だみたいな主張へは、ああいうのはどこの憲法も1週間でできているんじゃないかとか、そういう反駁ができるわけですよ。

関口さんの話を聞くとアメリカの豊かさにたいする平板としたイメージを崩すことができますし、大泉さんのトクヴィルの話から、民主主義なんか本場なんてどこにもないんだというような良い方向で相対化する視点を得ることは、やっぱり日本に住む者の視点として大事ですよ。いや日本の学生の目の高さこそ、いまのアメリカを見る視点としてちょうどいいかなと思うんです。だから松原先生の古典のセレクトというのは、とてもいいセレクトだったんじゃないかと思っています。

松原 ありがとうございます。記録しておきます。

鈴木 さっき関口さんがアメリカの講義システムだったら選ばないだろうというお話を聞いて、僕も本当にそう思いまして、やっぱりこれこそが今回の立教の醍醐味というか、チョイスの絶妙さなんだろうなと。アメリカの大学のシラバスだったら『国民の創生』の代わりに、たぶん『アンクル・トムの小屋』が入ると思いますし、関口さんのやつだったら、もうちょっと政治的にアクティブな60年代とか70年代の有名な著作をピックアップしようとするんじゃないかと想像します。『国民の創生』も『ヒルビリー・エレジー』も20世紀ですから、じゃあもうちょっと19世紀の古典作品を足したらどうなのかなというのがあるんですけども、でもそれだと時間がなくなっちゃいますからね。

松原 もう通年の科目にしてもっと入れましょうか。

鈴木 あと石川先生からご指摘された人種ですけど、このメンバーでやるとしたら、例えば石川先生だったら、逆に黒人とかアジア人というよりも、ア

アメリカが考える WASP だとかアングロサクソンというのは何か、彼らが考える中心というのは何かというのを問い直せるんじゃないかと思って聞いていました。例えばジェファソンとかアダムズが考えるアングロサクソン像とか、僕は石川先生のお話を聞いてみたい。

僕も自分自身の関心の中心には人種の問題があるので、建国当時に考えた理想の国民像を聞きたいんです。アメリカなんて、ジェファソンのような「偉人」たちが無人の地に上陸するサクソン人のおとぎ話を建国神話中心に据えて、人類の歴史を変えてみようとは本気で考えた国ですから。アメリカ最初期の神話的アングロサクソン像、そして革命が終わった後の共和政体の理念的なアングロサクソン像、で、19世紀後半、20世紀と人種化され、そして最後に WASP なるステータスに変形していきます。

『ヒルビリー・エレジー』も、冒頭から書き手が「僕は WASP じゃない」と告白するところから始まります。僕にとって、あの本はきわめて印象的なんです。ヒルビリーの世界の住人たちが、ジブンを語りを始めようとするに「僕は WASP じゃない」と言ってから始める点に揺るぎない文学性を感じてしまいます。他人に自分の血統を明かすことからはじめるなんて、ある意味英文学の様式美ですよ。で、話は飛んでしまうのですが、ヒルビリーの世界の住人たちも『国民の創生』原作のトマス・ディクソンの描く住人も、エスニック的には「スコッチ＝アイリッシュ」の人たちなんですね。「スコッチ＝アイリッシュ」という言葉はアメリカの、とくに南部の歴史を考えると、かなりのキータームなのかなと僕自身は信じているんです。でも黒人の人たちからみれば、かれらは均質な「白人」マジョリティに他なりません。でも彼ら「スコッチ＝アイリッシュ」の思っている中心というのは何なのかなと考えてみるのは、アングロサクソンってなんだろう、WASP って現実に生きている「そうじゃない」人びとにとってどのように投影されるものなんだろう、というのを考え直す授業とかがあったら楽しいかなと思います。

松原 白人性研究者たる鈴木さんならではの着眼かもしれません。

鈴木 そうです。白人なるもののよくわからないコアを、逆に「アジア人」と呼ばれる者たちから考えてみるみたい。

松原 そういうアイデアが出てくると、逆に振ったときにどうなのかも気に

なります。鈴木さんの後ろに映っているのは奴隷小屋ですが、似たような境遇の年季奉公人や、白人だけれどもプランテーションオーナーに雇われている貧農であるとかさまざまにいます。大泉さんが1回だけ触れてくれていますが、今回の講義では先住民にも基本的には触れていません。多様でしかも決して周縁的ではなく、アメリカ植民地の基礎条件である人の多様性、移動性、混雑性、こういう話にもっと焦点を当てるとどうなるのか。鈴木さんがおっしゃった WASP 的なものを突き詰めるプランが一方にあるとすれば、対極にはこういうやり方もありませんか。

アメリカのデモクラシーとポピュリズム

石川 ちょっと何か今の話の流れと合うかどうか分からないんですけども、いわゆる旧世界のヨーロッパにおいては、イングランド人というのは、まあ野蛮な土地の辺境の民です。むしろ新大陸に渡ったときに自らの特別な立場を再定義するようなどころがあって、ところが実際はアメリカに渡って来たヨーロッパ人というのは結構多様なんですよ。実際はオランダ人もいるし、スウェーデン人もいるし、ドイツ人もフランス人もユダヤ人も。

松原 スペイン語を結構話したといいますね。

石川 スペイン語も結構話していたんですよ。そうなったときに、例えばトマス・ペインを読んでいると、やっぱり彼が幾つかの理由でアメリカは独立すべきだと言っているんですけども、理由の一つが、お前たち、そもそもイングランド人だと勘違いしていないかと言うんですよ。アメリカ人というのはヨーロッパ中から、トクヴィルのあのときの視点はまだヨーロッパ白人しかたぶん頭に入っていないと思うんですけども、ヨーロッパ人なんだぞと、イングランド人ではないんだぞと。つまりさっきの俺は WASP じゃない、から始まるみたいな話が、時々レベルはグッと、規模は小さくなりますけれども、異議申し立てというのは割と初期の頃から散発的であって、それがある種のデモクラシーをつくっていったのかなという感じは、ちょっと僕はするんですよ。

つまりアメリカにおけるデモクラシーの重要な構成要素というのは、やっ

ぱり異議申し立てたのではないのでしょうか。

松原 反乱なんかも含めて、そういえばずっとやっていますね。

石川 というのは、私はヨーロッパの政治思想史からなぜかアメリカに入って来た人間なんですけれども、ヨーロッパの政治思想史の伝統の中で、デモクラシーがよき政治体制と考えられたことはないんですよ。これはプラトン、アリストテレス以来、悪しき政治体制なんですよ。端的に衆愚政治の別名なのです。ところがアメリカにおいて初めて良き政治体制になるわけなんですけれども、それがあつた種、文明論的な意味でのアメリカにおける政治思想の転換だと僕は見ているんですけども、そのときにデモクラシーというのがどっちにも働いているんですよ。それこそ黒人を差別する機能としても働くし、それからいわゆる WASP 批判の文脈、もっとアメリカ人の定義を広げる文脈でも出てくるので、そういう意味では、デモクラシーというのは、やっぱり危うい制度であると同時に、やはりアメリカという国を考えるときにデモクラシー以外での統治というのは難しかったのかなと。

あとちょっともう一つ言うと、例えばヤン＝ヴェルナー・ミュラーの『ポピュリズムとは何か』⁶という有名な本があります。そのポピュリズム論の定義を見ると、要するにデモクラシーから立憲主義的なシステムを抜いたものという、ざっくり言うとそういう定義になるんです。

松原 デモクラシーから立憲主義を抜くとポピュリズム？

石川 ええ。つまりどういうことかという、デモクラシーというのは僕らは社会科でこう習はずなんです。つまり多数決というのはあくまでも物事を決めるための手段でしかなくて、少数者の意見を尊重しなければならぬ。これも併せてデモクラシー。それに対してポピュリズムというのは、俺たちのアメリカという単純多数決というか、ある種の住民主権論というか。

松原 多数を取ったら、もうあとは黙ってろみたいな。

石川 あとは黙っているという。それで、ドイツ人のミュラーはそういうスパッとした分け方をしているんですけども、いや、待てよ、アメリカのデモクラシーというのは、そもそもポピュリズムじゃないかというのが私の感覚なのです。それで、ポピュリズムとポピュリズムがぶつかり合っただけでアメリカになっているという感じと言ったら極論ですかね。でもジェイムズ・マ

デイソンの『ザ・フェデラリスト』の第10編もそういう理解かなとも思えるのです。

松原 それは具体的にはどういう場面を思い浮かべると良いでしょう。

石川 例えばアンドリュー・ジャクソンが出てきたときに、彼は連邦政府に対して猛烈な反発心を持っているわけですね。何で猛烈な反発心を持っているかといったら、「白人居住者がインディアンに襲われているのに、連邦政府は全然助けてくれないじゃないか」と言うんですね。連邦政府の知識人たちは今の言葉で言うと妙にリベラルで、「だってそこ、インディアンがもともと住んでいた地域でしょう。そこに勝手に入って行ったのはお前たちなんだから、仲良くやれよ」と言うわけです。そうしたら、僕ら外国人から見たら、先住民はかわいそうとなるんだけど、仮に先住民のど真ん中に行ったアメリカ白人だと自分を想定してみたときに、連邦政府、この野郎になる。

松原 助けてくれないのかと。

石川 ですよ。広大なアメリカで利益感情の異なる人々がぶつかり合って、最後に小選挙区制度でドスンと行政首長を取りあえず決めるとというのがアメリカン・デモクラシーかなと思って。そういう意味ではアメリカン・デモクラシーとポピュリズムを分けることに、それほど意味があるのか。マディソンを読むと、もうデモクラシーなんていうのはそもそもポピュリズムなんだから、ぶつけ合わせると、抑制、均衡を取らせろという感じがするのです。

大泉 今のお話につながるかどうかちょっと微妙ですが、ドナルド・トランプが大統領執務室に飾っていたのがアンドリュー・ジャクソンの肖像画なんです。彼が主導した民主主義、いわゆるジャクソニアン・デモクラシーは白人同士の不平等をある程度埋める働きをしましたが、同時に先住民族を故郷から追いはらってもいるのですね。ラストベルトの白人労働者に同情する一方で、メキシコからの移民に冷淡だったトランプを想起させるものがあります。石川さんが今おっしゃったように、当時のインディアン政策は連邦政府のほうが慎重で、むしろ州政府のほうが強引なところがありました。現場の過激な声に押されるようにして着々と強制移住が進められていったのです。

ね。アメリカのデモクラシーには、歴史的にそういう差別的で暴力的な一面があるのではないのでしょうか。民意で押し流すような形で動くところは多分にあると思います。

石川 たぶん民意を民意で抑制するというシステムなんだと思うんですよ。その究極の例が南北戦争なのかもしれないですけども。完全な殺し合いですけども。

大泉 そうですね。話し合いで解決するのがわれわれがイメージしがちな民主主義ですが、実際に聞かれる声は人種や民族や性のフィルターで濾過されていたり、多数者の意見が専行していたりする。アメリカのデモクラシーは、普遍的というよりは特殊な制度ですよ。

松原 特殊というのはアメリカ的だという意味ですか？それともデモクラシーが前面化してしまうという意味で特殊？

大泉 マイノリティも含めた全市民が議員を選出して討論させることで皆の合意を導くという、立憲主義的なものだとはい底言いが難しいと言いますか……。

石川 だからあれですよ。議会制民主主義に任せる民主主義だけではないんですよ。住民主権的な民主主義。

松原 なるほど。こういう話を伺っていくと、これも一つの授業案になり得るということですね。デモクラシー研究、ポピュリズム研究というか。トクヴィルはたぶん入っているんだけど、でもその前後を組むものをもう少しと変えると、より特異なとかあるいは過剰にデモクラティックな、何ならポピュリズムときびすを接するようなアメリカン・デモクラシーの様子をもっと分かるような組み方もあるんじゃないかと。

大泉 私はそう思います。

石川 ポピュリズムを別のポピュリズムでぶつける。だから共和国は広くなければならないとマディソンが言ったのはもっともなのかなと思います。

今回改めて思うのは、アメリカを語るときの多様性ですよ。白人男性の語るアメリカもあれば、ジェンダーで見るアメリカもあり、エスニックで見るアメリカもあり、経済とか社会で見るアメリカもあって。一人の人間の時間が持てる研究時間というのは限られているので、僕も結局最近、選挙があ

るから現代アメリカのことも何かしゃべらされるのですけれども、まあ賛否両論です。そうするとやっぱりアメリカを研究する人の数の分だけアメリカが出てくるのです。もちろんこういうことはアメリカに限った話ではありませんが、アメリカは極めつけに多いと私は思います。そのときに結構アメリカ研究全体をいい物にしていく為には、やっぱり自分の専門分野と違う人ともやっぱり仲良くするというのが大事です。身内鼻根になるかもしれませんが、アメリカ研究業界は、他の地域研究業界と比較しても寛容ですよ。

松原 そのとおりですね。

石川 尊重するというのですかね。例えば松原さんのご研究と私の研究でもだいたい色合いが違うと思うんです。だけれども昔から友達でいられてますよね。研究には、こういうのがとても大事なのです。

松原 オムニバスみたいなこういう講義の一つのメリットでもあります。受講生にとってだけでなく、われわれにとってもそうです。そして、今日こういう会を設けたのも、この企画を十分に味わうには、やっぱり最後に毛色の違う者同士で雑談をする必要があるからですね。たっぷり堪能いたしました。みなさまありがとうございました。

註

1. タナハシ・コーツ『僕の大統領は黒人だった——バラク・オバマとアメリカの8年（上・下）』池田年穂・長岡真吾・矢倉喬士訳（慶應義塾大学出版会，2020年）。
2. エイミー・カプラン『帝国というアナーキー——アメリカ文化の起源』増田久美子・鈴木俊弘訳（青土社，2009年）。
3. 宇野重規『民主主義とは何か』（講談社，2020年）。
4. 空井護『デモクラシーの整理法』（岩波書店，2020年）。
5. この作品は、William Christenberry, *Ghost Form* (1994) である。オグデン南部美術館にて企画されたクリステンベリー回顧展の展示を撮影し、座談会の背景にした。この展覧会の概要と同作品は、同美術館のウェブコンテンツから視ることができる。Ogden Museum of Southern Art, "Memory Is a Strange Bell: The Art of William Christenberry," accessed March 31, 2021, <https://ogdenmuseum.org/exhibition/memory-is-a-strange-bell/>.
6. ヤン＝ヴェルナー・ミュラー『ポピュリズムとは何か』板橋拓己訳（岩波書店，2017年）。